

氏名(国籍)	いー 李	そん 成	ぎゅ 圭	(韓 国)
学位の種類	博 士 (言 語 学)			
学位記番号	博 乙 第 1892 号			
学位授与年月日	平成15年1月31日			
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	日本語受動文の研究			
主査	筑波大学教授		林	史典
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	坪井	美樹
副査	筑波大学助教授		矢澤	真人
副査	筑波大学助教授		大倉	浩
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	鷲尾	龍一

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語の受動文の表す意味について、包括的な記述をなすことを目指したものである。従来、受動文については、直接受動と間接受動という二分法を軸として、これとの関わりにおいて、動詞の種類や、旧主語の表し方(動作主マーカー)の違い、被害性の意味の有無などについて論じられてきた。しかし、それぞれが相互に関連することは示唆されても、微妙なずれや例外も少なくなく、十分に包括的な解釈には至っていなかった。

本論文は、従来の見解に対する的確な批判と、動詞の自他や動詞の格体制など、関連する言語事象の詳細な検討の上に立って、現代日本語の受動文の持つ意味特徴について考察を加えている。そして、従来提唱されてきた直接受動と間接受動という区分は不適當であり、日本語の受動文の基本的意味は、動詞の自他を問わず、〈主語または話し手のコントロールできない、統制できない、ある出来事が起きた〉ということを表すと主張し、旧主語の表し方や間接受動文の被害性、いわゆる所有受動の位置づけなどについても、この基本的意味から適切な解釈が与えられることを示している。さらに、以上の知見をもとに、日本語と韓国語の受動文について、漢語動詞を例に対照し、それぞれの受動文のあり方の違いを明らかにしている。

本論文の構成と各章の要旨は、以下のとおりである。

- 第1章 序論
- 第2章 日本語受動文の枠組み
- 第3章 動作主マーカーについて
- 第4章 間接受動文における「被害性」について
- 第5章 いわゆる所有受動について
- 第6章 漢語動詞における受動
- 第7章 結語

「第1章 序論」では、本論の構成とおおよその内容、受動文をどのように捉え、分析を進めるのかという、論考にあたっての基本的立場を示す。特に、従来指摘されてきた直接受動か間接受動かという見方では例外が多くなること、日本語の受動文は当該動詞の意味特徴が反映される面が大きいこと、受動文研究において日韓の対照

が極めて有効な手段となることなどについて述べる。

「第2章 日本語受動文の枠組み」では、これまでの日本語の動詞の分類に関わる研究や、自他の対立、受動・使役などのボイスに関わる研究について、詳細に紹介し、それぞれについて批判的に検討を加えるとともに、日韓の受動文の対照研究の有効性が示される。

これまでの受動文研究では、能動文と受動文との対応関係を軸に、動詞の自他と直接受動・間接受動との関連が注目されてきた。そして、「雨に降られた」のような間接受動文については、とりわけ被害性が強調されてきたし、「花子は太郎に子供を殴られた」のような受動文も「太郎が花子の子供を殴った」のような能動文から出たものとされて、所有受動として、特別扱いされてきた。自動/他動、能動/受動、直接/間接などの対立を相互に関連させ、さらに被害性を結びつけることで、一見、整然と見える体系を作り上げてきたのである。しかし、「(土産をあげたら)友達に喜ばれた」や「私は彼に(私の)協力を感謝された」のように被害性を伴わないものは少なく、整合性に欠けた記述であると言わざるを得ない。

著者は、日本語の受動文研究には、能動と受動、直接・間接などを機械的に関連させるだけではなく、個々の動詞の意味特徴を反映する(ないしはそれと深い関わりの中で捉える)ことが必要であるとし、日本語の受動文は、<主語または話し手のコントロールできない、統制できない、ある出来事が起きた>という基本的な意味特徴を持つことを提示する。

「第3章 動作主マーカーについて」では、対応する能動文の動作主が、受動文において、どのようなマーカーで示されるのか、「に」「によって」「から」「で」など、マーカーの違いは何を表すのかという問題について考察を加える。まず、従来の研究について詳細な検討を加え、従来の研究では、主として、能動文の主語が受動文でどうなるのかという点に注目されてきたため、受動文中の「に」「によって」などで表される成分も、対応する能動文の主語(動作主)であるという点がことさら強調され、その受動文そのものにおいて、これらの成分が担う意味についての検討が不十分であったとし、従来のように、対応する能動文の存在を常に前提にした研究ではなく、受動文そのものの成分のあり方に目を向ける必要があることが述べられる。そして、動作主マーカー以外の成分にも目を向けること、また、「に」「によって」「から」「で」などでマークされた成分に対しても、動作主という意味以外に、原因・理由や手段・方法といった意味が備わっていることに注目すべきことなどが、具体的な事例とともに示される。

「第4章 間接受動文における「被害性」について」と「第5章 いわゆる所有受動について」では、いわゆる間接受動文の表す意味について考察を加え、受動文における直接と間接との二分法は、意味的な面からみると有効ではないことを示す。

まず、「第4章」では従来、自動詞受動文に現れるとされてきた「被害性」について考察を加える。「太郎が雨に降られる」のような自動詞受動文は、受動文の主語(「太郎」)に被害を被る意味が加えられるとされてきた。しかし、なぜ、自動詞受動文に「被害」の意味が伴うのかについては、十分な解釈はなされておらず、また、自動詞受動文でも被害の意味を伴わないものが存在するという事実から、著者は、このような一般化は不適切であるとする。むしろ、受動文においても、利益的な意味を表す動詞や中立の動詞、被害を表す動詞など、それぞれの動詞が本来有している語彙的な意味が反映しているのだと見なした方がよく、その出来事に対し、受け手が直接関与できないという点から、文脈的に被害や利益などの意味がもたらされるのだとする。そして、これは直接受動文でも同様のことが言えるのであり、「被害性」によって、意味的に、直接受動文と間接受動文を区別する必要はないことを示す。

続く「第5章」でも、間接受動文の一種とされる所有受動文(持ち主の受け身)について考察を加える。従来問題にされてきた、持ち主と持ち物との分離可能性の問題や、持ち物の具体・抽象の別と受動化との関連などについて検討し、所有受動文においても、第4章で述べたのと同じく、それぞれの動詞が本来有している語彙的な意味が反映すること、所有受動文の正否は、持ち物の具体・抽象ではなく、持ち主が持ち物を分離可能と捉える

かそうでないかに関わる事、受動文の主語に持ち主が立つ所有受動文（間接受動文）と持ち物が主語に立つ直接受動文とは焦点の当てかた以外には大きな違いはなく、所有受動文に被害性を関連づける必要性はないことを示す。

「第6章 漢語動詞における受動」においては、これまでの議論を元に、日本語と韓国語の漢語動詞の受動文について考察する。漢語動詞は、日韓で共通のものが多く、形態的にも自他の対立が無く、さらに能動・使役・受動のボイスの対立も一般の動詞より単純であり、日本語と韓国語とで対照するのに適しており、一方、日本語では、ほとんどすべての動詞がサレル形になるのに対し、韓国語では、toyta形のほかに、patta形やtanghata形が用いられ、韓国語の受動の捉え方と日本語の受動の捉え方を比較する手がかりにもなることが述べられ、具体的にそれぞれの言語において、漢語動詞がとる形態と意味、自動詞的な漢語動詞文と漢語動詞受動文との比較、それらをもとにした両国語の受動文の比較・分析を行う。韓国語の漢語動詞は、もっとも生産的で規則的なtoyta形受動文が<ある事柄の状態変化>を表すのに対し、patta形受動文は<主語が動作主の動作を受ける>こと、tanghata形は<動作主の動作によって、主語は自分の意志に反するような状態におかれる>ことを表すといった意味的特徴が見られることを指摘する。そして、日本語の漢語動詞の受動文は<ある事柄の状態変化において動作主、原因が関与する>という包括的な意味的特徴を持つのに対し、韓国語の受動文は、事柄を状態変化として捉えるか、動作主と対象との関係として捉えるかによって使い分けられることを示す。

「第7章 結語」では、各章の議論と結論をまとめ、全体を総括する。

## 審査の結果の要旨

日本語の受動文に関わる事項は多岐に渡り、それぞれについて、これまでに多くの研究が出されている。その流れを正確に追うだけでも容易ではなく、ましてやその全体像を俯瞰することは極めて困難なことと言える。本論文が目指したのは、まさに、日本語の受動文の全体像を俯瞰して、包括的な意味的特徴を抜き出すという点にある。このもくろみを達成するためには、動詞の自他の対立から始まって、能動と受動や直接受動と間接受動の対立、被害と利益の意味の捉え方など、受動に関わる現象のほか、文の格体制の問題や、名詞句の有情・無情、動詞の意図性や変化性など、広範囲に及ぶ問題を取り扱うことが要請される。

本論文の著者は、多くの先行研究を丁寧に従い、それぞれの見解を批判的に検討することで、この問題に立ち向かい、多くの用例を素直に観察することで、受動文を包括する意味的特徴を導きだしている。ことに、「第6章」で展開された、漢語動詞を元にした日韓の受動文の対照研究は、多くの実例を元に、緻密な観察と的確な推論とを組み合わせ構築されており、先だつ章で示した筆者の仮説を裏づけるとともに、受動という観点から日韓両言語を対照することの有用さを示す、極めて有意義な論考となっている。今後の日韓両言語の受動文の対照研究において、真っ先に参照されるものとなることが予想される。

扱う範囲があまりに広いため、一部の分野で、部分的に十分な論証とはなっていない点も見られる。しかし、その多くは、豊富な用例や間接的な論考により補われるものであり、本論文の学位論文としての価値を損なうものとは思われない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。